

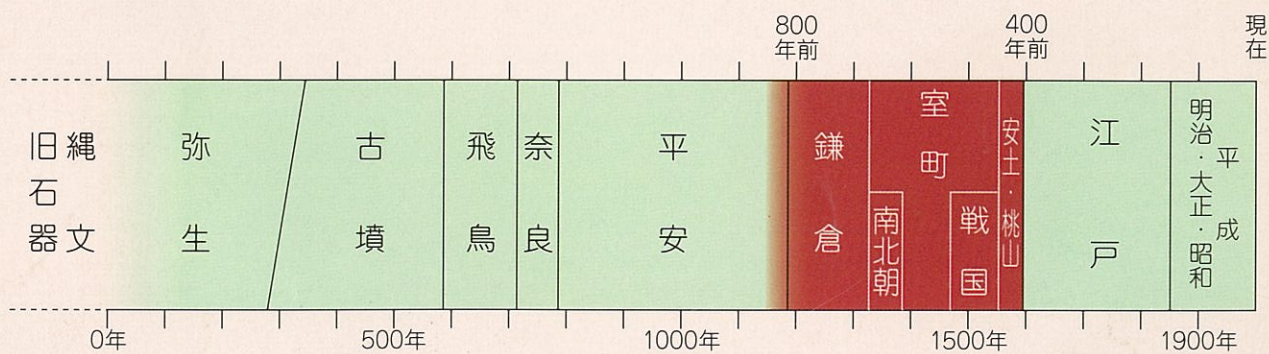
仙台の中世

—遺跡からみる人々のくらし—



洞ノ口遺跡出土の鏡

年表



柳生台畑遺跡出土の古瀬戸瓶子 (鎌倉時代)

武士の世に

中世は武士が政治の実権をにぎった時代です。ほぼ、平清盛の頃（平安時代の終わり：12世紀中頃）から豊臣秀吉の頃（安土・桃山時代：16世紀末頃）までの約450年間をさします。

平清盛の頃、陸奥国の政治は陸奥国府と平泉の奥州藤原氏が分担して行っていましたが、奥州武士団の棟梁である藤原氏の影響力は東北地方全体に及んでいました。

1189年、源頼朝は「征伐」の名のもとに全国総動員による大軍によって奥州藤原氏とそれに連なる奥州武士団を攻め滅ぼしました。合戦後、仙台には関東武士団がのり込んできました。鎌倉時代には伊沢氏（後の留守氏）、国分氏、和田氏、北条氏などの関東武士の所領がありました。所領を得た武士の当主の多くは鎌倉に住み、一族郎党などを派遣して現地の実務にあたらせ、鎌倉に居ながらにして、奥州の富を集めました。

南北朝の内乱期（1336～1392年）は、陸奥国府のある仙台周辺も岩切城合戦など戦乱の舞台となりました。内乱の中で関東武士も土着・移住し、在地の領主として自立していきました。内乱後、陸奥国の政治の中心は県北の大崎地方へと移りましたが、経済活動の発展していたこの地では留守氏や国分氏などが覇を競っていました。

戦国時代になると、両氏はしだいに南方から進出した戦国大名伊達氏の下に吸収されていきました。

中世の遺跡分布図



住まい 交通と屋敷跡

中世の陸奥国府は多賀国府と呼ばれ、近年、政庁は多賀城市西部から仙台市岩切周辺にあったとする説が有力です。この地は、七北田川と中世の奥州の南北幹線道路である奥大道との交差点であり、さらに、国府の港・塩竈にいたる野中大道、古七北田川の河口・湊浜にいたる田子大道とも結ばれています。

古い記録によれば、この付近に冠屋市場、河原宿五日市場があったとされています。海・川・道路の水陸交通網によって、各地からさまざまなものが運び込まれました。人々も行きかい、都市としてのにぎわいをみせていました。また、岩切の丘陵は東光寺をはじめとする寺社の立ち並ぶ聖地でした。多賀国府を中心とした中世みちのくの都がここにありました。鴻ノ巣遺跡や洞ノ口遺跡などの発掘調査は都市住民の生活のようすを教えてくださいます。

仙台市内で発見されている中世の屋敷跡の多くは、いずれも、岩切周辺と同じような水陸交通の要衝の地にあります。代表的な地域として、中央部では、国分寺に近い若林区南小泉の周辺、南部では、名取熊野三社に近い太白区大野田から柳生の周辺があげられます。広瀬川・名取川と奥大道・浜からの道路の要地にあります。昨年、大野田で中世の道路跡が発見されました。土砂を突き固めて舗装しているこの道路跡は奥大道の可能性がります。中世は河川と道のネットワークによって人と物と銭の動いた時代です。



太白区大野田で見つかった中世の道路跡（北から撮影）

（前略）
 それをもなほすきて、たけくまの松の陰にたひねして、木のまの月に心をつくし、名取川のわたりを過るとして、行水のかへらぬことをあはれむ、宮城野の木の色も、まことにかさもりあへぬほどなり、花の色々にしきをしけるとみゆ、中にも、もとあら（本荒）の里といふ所に、色などもほかにはことなるはきのありしを、一枝をりて、
 宮城野の萩の名に立もとあら（奥）の さとはいつよりあれはしめけむ
 とおもひつ、け侍し、……さてみちの国たか（多賀）のこふにもなりぬ、それよりおくのほそ道といふかたを、南さまにすゑのまつ山へたつねゆきて、松原こしにはるくとみわたせは、けになみこすやうなり、あまのつりふね共も、さなから木すゑをわたるか（後略）

南北朝時代に奥州を旅した僧宗久の紀行文「都のつと」より



両脇に側溝がある道路跡

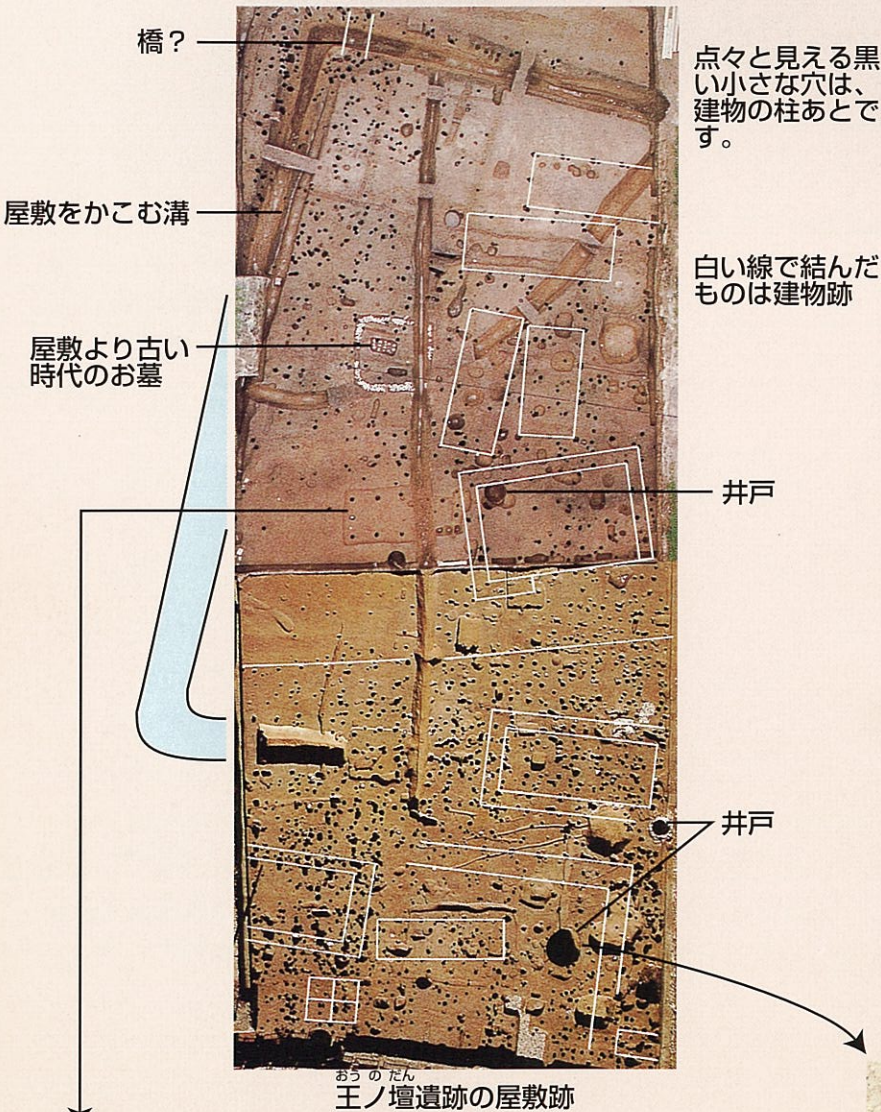


路面の断面 (白っぽい砂が固くしまっている)

見つかった道路跡 (太白区大野田)

道路跡は両脇に側溝があり、路面の幅は3~4mあります。路面は砂を固くたたきしめています。

屋敷の暮らし



鉄製品の製造工房 (人の立っている所が柱の位置)



方形の木組みのある井戸



推定奥大道近くにある大規模建物跡 南小泉遺跡



推定田子大道沿いの市場のあたり 鴻ノ巣遺跡

くらしの道具

遺跡からは、飲食や調理に使われた容器、暖房具や履物、文房具など日常生活用具のほか、農具や工具などの生産用具も見つかります。出土例が多いのは飲食器や調理具として使われた各種のやきものや、漆器などの木製品です。この他に茶の湯の道具や高級な調度品が出土することがあり、有力者の裕福な暮らしがうかがえます。



中国からもたらされた青磁などのやきものと銭

仙台にもちこまれたやきもの

鎌倉時代頃、仙台周辺では壺・甕・播鉢などの貯蔵・調理具は常滑・瀧美産のものや白石市付近の窯の製品など国内産の陶器が使われ、碗や皿などの食器は中国から輸入された青磁・白磁などの磁器がほとんどでした。

南北朝後半以降、食器や調度品は中国産の磁器に代わって瀬戸や美濃など国産の陶器が多く見られるようになります。中国産の磁器も、戦国時代になると青磁・白磁が減少し、染付が輸入されるようになりました。



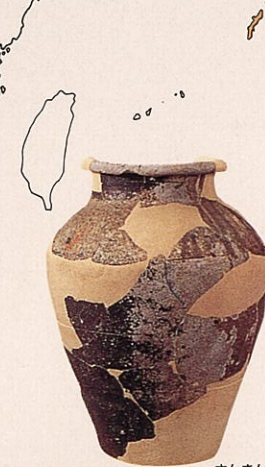
朱の文様があざやかな漆器碗



草履の芯・下駄・大足 (農具)



日本と中国の主なやきものの窯



常滑窯で焼かれた三筋壺



かめ 地元の窯で焼かれた甕



瀬戸窯で焼かれた天目茶碗



地元の窯で焼かれたすり鉢



かわらけの皿



おんじゃく 温石 (石製のカイロ)

サイコロ

「三斗三升」と書かれた木簡

戦いの道具 武具

武具は、甲冑などの防具と、弓矢・刀剣などの攻撃具に大別され、武士が歴史の表舞台に立った中世を考える上で、重要な資料になっています。中世は、この武具がいくさのありさまと関連し合いながら大きく変化した時期です。例えば、騎馬武者に代わり歩兵がいくさの主体となった南北朝時代には、槍が発生し、しだいに長大化します。戦国時代後半には鉄砲が普及し、いち早く注目した織田信長が武田騎馬軍団を破ったことは有名です。



鉄のやじり(雁股鏃)
中在家南遺跡



朱鞘の脇差(長さ約60cm)
北目城跡



小刀(長さ約30cm)
中在家南遺跡

祈り 東光寺

宮城野区岩切にある東光寺は、境内に120基余りの板碑と仏像の彫り込まれた石窟などがあり、文書の記録からも中世にさかのぼる寺と推定されていました。昭和61・62年の発掘調査では鎌倉～南北朝時代の瓦がたくさん出土し、瓦を葺いた中世寺院の存在が県内で初めて明らかになりました。東光寺は、多賀国府を中心とした中世都市の人々にとって、信仰の一大中心地だったと考えられます。



七北田川と東光寺



仏像の彫られた石窟群



石窟に彫られた阿弥陀如来・薬師如来像



格子の文様のある平瓦



石窟に彫られた地藏菩薩像



迫力あるつくりの鬼瓦



巴文の軒丸瓦と唐草文の軒平瓦

板碑の時代

板碑は中世につくられた石製供養塔の一種で、主に板状の石に梵字、造立の年月日や趣旨などを彫り込み、墓地などに立てたものです。鎌倉時代から南北朝時代(14世紀中頃)にかけて多くつくられました。

仙台市内には現在462基が確認され、県内では石巻市に次ぐ多さです。最古の板碑は柳生と澁不動尊の文永10(1273)年のものです。石材は地元のものが多いのですが、岩切周辺では石巻市稲井産の粘板岩も用いられます。

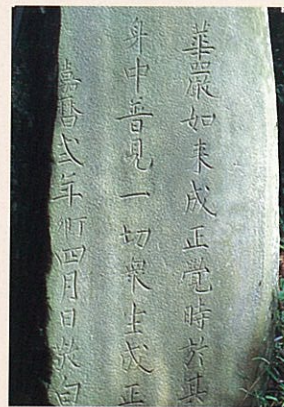


- 種子**
仏などの本尊を表す梵字
これはバンと読み
だいにもよらい
大日如来を表す
- 紀年銘**
一般に碑を造立した年月日
これは文永10年(1273)2月
- 願文**
造立の趣旨など
これは極楽往生を祈る
また、仏徳や教理を詩の形で
述べた「偈頌」が彫られるものもある

(例: 太白区柳生の板碑)



宮城野区岩切東光寺の板碑
嘉暦2年(1327)

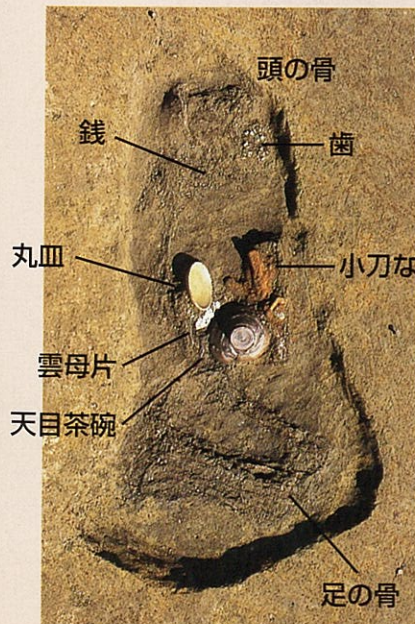


上左の板碑に彫られた偈頌

青葉区広瀬町澁不動尊の板碑
文永10年(1273)

いろいろな墓

中世の墓には、土壇墓・尖葬墓・荼毘墓・塚墓・墳墓堂などがあります。副葬品としては天目茶碗などのやきものや漆碗・銭などがみつかっています。しかし、このような墓に葬られたのは武士や僧侶などごく一部の人々だったようです。一般の人々の墓はよくわかっていません。絵巻物などを見ると、河原に野ざらしにされた遺体も少なくなかったようです。



副葬品をもつ土壇墓(長さ約1m)
中野高柳遺跡



一辺5mの方形の塚墓
中央の墓穴には棺の台石がある
王ノ壇遺跡



火葬した場所をそのまま墓とした荼毘墓
王ノ壇遺跡